

を否定しようとは思いません。しかし、そこばかりに注目し過ぎると、本当に大切な物を見落としてしまうのではないのでしょうか。

そして、私自身もその大切な物とは「目に見るとのできない世界にしかない」と最近ひしひしと感じます。

と言いますのも先月は多くの遺族の方に出会う機会がありました。

その出遇いの中で今は亡き愛しい人の話しに話題が移りますと、その故人を「目に見ることの出来る世界」で話す人は誰一人としていませんでした。皆さん口を揃えて、その亡き人との思い出でや、その人がどんな人間味があつたかというお話しをしてくれるのです。

しかし、私たちは目に見えるものばかりに執着してしまい、それが苦しみの根源にもなり得ることを知らずにいます。お釈迦様は、目に見える世界は、目で見ることができない世界に包まれて、支えられているとも教えられています。

そして浄土真宗の宗祖である親鸞聖人は、南无阿弥陀仏とお念仏申す人生を歩まれました。

そのお念仏は願行具足の念仏である示され、「仏様の願いと行とが六字の中にととのえてあるから必ず往生ができる」とお示しになっておられます。

私の行いとしての念仏であれば不足してしまうものを、阿弥陀如来のおはたらきがあるがゆえに具足しているのです。

私が手を合わせることに、南无阿弥陀仏と念仏申すこと、すべては阿弥陀如来がはたしている姿です。そのおはたらきがこの目に見えずともこの耳に聞こえてくるとき、私は手を合さずにはいられません。

そのお心を広島の高松和上は、「声に姿は見えねども 声のまんまが仏なり 仏は声のお六字と 姿を変えて 帰り来ぬ」と喜ばれました。

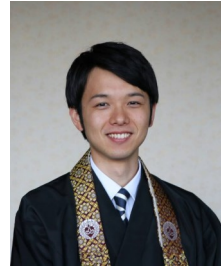
さまざまな現象が春の季節を知らせて頂くように、南无阿弥陀仏とお念仏申す中に、いつも私と一緒にいて下さる如来様のお心をお聞かせ頂きます。

# 佛心

二〇一八年五月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺



目に見えない世界

先月はバンクーバー・モントリオール・カルガリー・ハミルトンへ

の出張でトロントを留守にすることが多々ありました。皆様とゆっくりお話をできる時間がなかなか持てずに申し訳ございませんでした。

今月もしくは来月にもでも皆様にそれらの出張で得た学びを還元できたらと思います。

さてそんな主張中、バンクーバーで見た桜の花びらは印象的で、「とうとう春が来た！」といった高揚感に溢れる春の暖かさを教えてくれるものでした。

その春といえは高野辰之さんの童謡「春が来た」が有名ではないでしょうか？

春が来た 春が来た  
どこに来た

山に来た 里に来た  
野にも来た

彼は長野県出身

だそうです。この

「春が来た」という歌は、冬の厳しい寒さが終わり、雪が解け、花が咲き、鳥が鳴く姿を見て、待ち遠しい春が来たのだという喜びが伝わってくる歌であります。

春という季節そのものは目に見えるものではないかもしれません。

しかし、その季節に咲く花や、冬眠から目覚めた動物を目にするこことによって、それぞれの人生の中で感じるここのことができる世界であります。

その目には見えなくても感じるここのことができる物事について興味深いお話があります。それは、私たちの世界には2つの世界があるというお話です。その二つの世界の一つは「この目で見るここの出来る世界」そして、もう一つの世界が

「この目で見るここの出来ない世界」です。

建物や人の姿はこの目で見るここの出来ませんが、心や愛情、信頼、ぬくもりといったものは目で見るここのできません。

ただ、今の現代社会は皆がこの「目で見るここの出来る世界」に趣を置き過ぎているような気がします。

アンチエイジングなどといった容姿に気を配る人がいれば、その人は高額な商品であったとしても簡単にその商品を手にとってしまう。

社会的地位に囚われる人がいれば、その人はすぐにどのようになれば簡単に成功を手に入れることが出来るかを気にして、すぐにビジネス本を手にとってしまう。

このように考えてみますと、私を含めた現代社会に生きる人たちは、どのように他人から見られるかを気にする人が多くいるような気がします。決してそのような自分の姿や形、地位にこだわり努力している人